

ii) 緯度効果の絶対値は冬大きく、夏小さい。

iii) Δt_j 分布は大略的に山岳地帯は大きく、平野部は小さい。 Δt_j 分布は宮城県の東北部と西北部と南部に3つの低い部分がある。

iv) 最低気温は約20km内陸まで直線的に海洋効果の影響を受け、海水温によって1月は約 1.0°C 引き上げられ、8月は約 1.3°C 引き下げられる。最高気温は約50km内陸まで非直線的な海洋効果の影響を受け、海水温によって1月は約 1.0°C 引き上げられ、6, 7, 8月は約 1.5°C 引き下げられる。

v) 海洋効果は気温と海洋水温との差に対して、近似的に直線的な相関を持つが、より正確に言えば、冬より夏が顕著である。

以上の調査で問題となるべき点の主なものを上げると

1) 宮城県の地勢の特性として、標高 h_j と海岸からの距離 l_j とが互いに独立ではないので、純粋な標高効果と海洋効果を算出することが困難なこと

2) 各係数 $\frac{\partial t}{\partial h}$, $\frac{\partial t}{\partial \varphi}$, $\frac{\partial t}{\partial l}$, Δt_j , $\frac{\partial T}{\partial h}$, $\frac{\partial T}{\partial \varphi}$, $\frac{\partial T}{\partial l}$ ΔT_j のより正確な数値を求めるには2次的に反復して係

数を求める必要があること。

3) 各係数を使って次には逆に宮城県内の任意の地点の月平均気温を算出できるわけである。しかしその際に任意の地点の標高、緯度、海岸からの距離はわかったとしても、展開度や地被状態の尺度となるものはわからないだろう。それで、推定値を出した場合(3)と(4)式からわかるように必然的に $\Delta t_j + \varepsilon_{ij}$ (最低気温), $\Delta T_j + \varepsilon_{ij}$ (最高気温) の誤差を生ずるわけである。この誤差がはたしてどの程度であるかということ調べたら、よかつただろうこと。

最後に内海技術部長の不断の御鞭撻に対し、また終始御指導くださった草野観測課長と角野地上係長に深く感謝する。また係員の皆様の日頃の好意と協力に深く御礼申し上げます。

参 考 資 料

- (1) 正務章・米久保義勝：松本地方の晩霜時における最低気温の地理的分布について、研究時報 9, p. 427~430 (1957)
- (2) 気象庁技術報告第2号、任意地点の月平均気温の推定法 (1960)

気 象 界 消 息

1. 淵氏インドに出張

本学会理事、気象庁海洋課長の淵秀隆博士は7月15日から7月23日まで、「国際インド洋観測会議出席ならびにインド国気象機関視察」のためインドに出張された。

2. 藤原氏ヨーロッパに出張

本学会会員、気象庁測器課補佐官の藤原寛人氏は、「気象用レーダーおよび無線気象測器の研究面と実情調査」のため、7月22日から10月3日まで、スエーデン、西ドイツ、連合王国、スイス、エジプト、インド、タイおよび香港に出張される。

3. 広野氏フランスに出張

本学会会員、気象庁地震課長の広野卓蔵博士は、「パリで開催される国際測地学、地球物理学連合国際地震集報小委員会会議に出席」のため、7月7日から7月17日まで、フランスに出張された。

4. 竹内氏沖縄に出張

気象庁高層課指導係長の竹内且氏は、「琉球政府職員に対し、高層気象観測の実地指導を行なう」ため、6月9日から9月10日まで、沖縄に出張される。

5. 梅雨前線による豪雨

6月24日から7月10日にかけて、日本各地で梅雨前線による大雨が観測され、多大の被害があった。(本号234頁参照)